

雲乗寺報

2025年度 報恩講法要
住職インタビュー(能美潤史先生)
戦後80年-前住職からのメッセージ
文章法話
2026年度行事予定表
お知らせ

2号

写真：2025年度 報恩講法要 10月11日(土) 山門

はじめに

今年から始めました寺報ですが、無事に第2号を発行することができました。発行させていただくに
あたって、どのようにすれば手に取っていただいた
方に見やすいものにできるのか、試行錯誤をしながら
この号を作らせていただきました。

作らせていただくたびに皆様にご愛読いただける
寺報にさせていただきたく、研鑽を積んでいきたい
と思いますので、お読みいただいた際には是非、
皆様の感想をお聞かせください。

目 次

2025年度 報恩講法要		1P
住職インタビュー(能美潤史先生)		3P
戦後80年-前住職からのメッセージ		11P
文章法話		13P
2026年度行事予定表		15P
お知らせ		16P

2025年度

報恩講法要



ほうおんこうほうよう あみだ
報恩講法要とは、阿弥陀さまのあらゆる人びとを救う
はたらきによって信心をめぐまれ、念仏を申す人生を歩
み、この世の縁が尽きるとき浄土に生まれて仏となり、
迷いの世に還って人びとを教化するというみ教えを
お示しくださった親鸞聖人に感謝し、そのご遺徳を
偲ぶ中に、阿弥陀さまの救いをあらためて心に深く
味わわせていただく法要です。



龍谷大学教授：能美潤史
あききょうく やまがたにしそ えんりゅうじ
(広島 安芸教区 山県西組 圓立寺)

とうじいんじゅうしょく おんし
この度の報恩講法要では当寺院住職の恩師でも
りゅうこくだいがくきょうじゅ のうみじゅんし
あります、龍谷大学教授の能美潤史先生にご法話いた
だきました。

ざだんかい
そのご法話のあと、インタビューや座談会などさせてい
ただき、ご来場いただいたみなさまには大変好評をいた
だきました。

けいさい
次のページでは、そのインタビューの一部を掲載させ
ていただきました。ぜひお読み頂けれ幸いです。



住職インタビュー

のうみじゅんし 能美潤史 師



住職

本日は大学時代の恩師でもある龍谷大学教授であり、広島のア芸教区にあります圓立寺副住職でもあります、能美潤史先生にお越しいただきました。教願寺報恩講法要ではご法話いただきましてありがとうございます。

それではインタビューをさせていただきます。よろしくお願いします。

取材前にアンケートをさせていただきましたけれども、ここからこの答えに対して深掘りさせていただく形でインタビューさせていただきたいと思います

Q1. あなたにとって浄土真宗とは何ですか？

住職

かなり広い意味合いの質問だったと思うんですけど、その中でお答えになったのが人生のよりどころというところですね。「人生のよりどころ」浄土真宗の中でも、阿弥陀様のこの教や願いというところによっていくというようなところがあると思いますが、改めてどういう意味合いでこういう答えになったのでしょうか

能美潤史

ワンフレーズで「人生のよりどころ」と書かせてもらいましたが、私がたまたまお寺の跡取りとして生きてきたんじゃないくて、兄が急に「お寺継がないぞ」と言っ

て末っ子だった私が跡取りになったんで、自分なりに「お寺の跡取りってことはお坊さんになってやっていくの？」と考えたときに、自分なりに浄土真宗ってものをしっかり理解したいし、味わいたいというのがありました。それが23歳ぐらいのときかな。そのときに『歎異抄』とかいろいろ読んでみて、正直な感想を言うと、「で？」という感じで「これを、ありがたいって思っただけじゃいけないの？」みたいな。本当にそれは正直なところで。そこから結局でも食わず嫌いいし嫌いじゃないと思って、とりあえず「親鸞さんが書かれたものは全部読んでみよう」「本願寺の法話もどんどん聞きに行ってみよう」とがむしゃらに何年かやって(学んで)、もう一度一番最初に「え？」となった歎異抄が、四・五年経ってもう一度読んでみたら、今度はもう鳥肌が立って。「こんなすごいこと書いてたんやっけ？」という感じでした。

そこで、自分は「知識でわかろうとしてた」ということに気づいたんです。「これ知識でわかる教えじゃないんだな」というところからだんだん(理解が)深まってきた、あとはね、私43ですけど、20代30代40代に入っていくと、特にお寺の跡取りとして前にどんどん出るようになったら、もう本当に小さい頃仲良くしてくださったよくしてくださったおじいちゃんおばあちゃんのお葬式とかも行くようになってきて、やっぱりこう、

お浄土という世界が、ただ単にそれが説かれてるとか教えられてるじゃなくて、お浄土にどんどん明かりがともっていくとかね。あの人もこの人も、最近是我的親が80超えて「もう10年も20年も一緒にいるわけでもないかもな」という。お浄土っていう世界の捉え方っていうのがかなり現実的にあったかいものとしあらわれてきました。今日御法話の中でも言いましたけど「死んだ後の教えじゃなくて今、今ここにね、なんまんだぶつになって、



能美潤史

阿弥陀さんが届いてくださる」というお話で、お浄土っていうのは死んだ後初めて出会っていく世界じゃなくて、もう今ここに届いてるんだっていう。

そういう私の学びの中とか、お参りの中とか、年齢の深まりとかいろんなものを含めた上での「人生のよりどころ」と、そんな答えなんですよ。

だから私は今「もうこの教えがないととてもとても、ただただ虚しいだけの人生だな」と考えています。

住職

非常に短いその言葉の中ですけれども自分の経験の中に、形づくられるこの言葉であるわけですね。

Q2. 仏教の中での浄土真宗の特徴を一つ挙げてください

住職

仏教の中という日本の中でもいろいろな宗派があって、その宗派の中でも同じ考えとは限らないというふうな中で、この浄土真宗本願寺派の特徴を一つ挙げてくださいというふうな中で、「死んでから救われるのではなく、今ここで仏様の声・念仏を受け取り、救われていく」と答えています。難しくいうと「現生正定聚」のお話だと思うんですけれども、これが一番特徴的だと思われた



その理由を深掘りさせていただきたいんです。

能美潤史

仏教の中でというと、まず仏教っていうのは基本スタイルは自分で修行して、煩惱をなくしていくというのが基本スタイルですけど、結局、浄土真宗の開祖である親鸞聖人はもちろん20年間で厳しい修行をされたけれども、「自分はこの行では悟りを開けない」と考えていったわけです。

やっぱり親鸞聖人の教えを慕う私達も同じスタンスです。私達はこの自分の力で今、仏になっていくということは難しいという。そこで、命終わった後浄土と

いう世界があるよと開かれて、その浄土教というまた
広いくりで、浄土教の中にもいろんな教えがあるわ
けです。親鸞聖人のそれまでは、南無阿弥陀仏と
念仏することによって功德を積んで、そして浄土に
近づいていくとか、あるいは浄土に行ってから、浄
土というより良い世界で仏を目指していくと、こう説か
れるものがある中で、親鸞聖人は「今、南無阿弥陀
仏と念仏を通して、阿弥陀様がその届いてくださる。
それだけじゃなくて、仏となる徳を全部持って、それ
を南無阿弥陀仏に込めて届いてくださるんだ。つま
り、私達はもうお念仏の教えをいただければ命終わっ
た後はお浄土に住けるし、仏に成らせてもらうんだ」
といただいていくんです。これが浄土真宗の一番



の中心であり特徴ですよ。ね。「本当にならしていただ
くんだ」と「やっぱり先だった方も仏になられてるんだ」と
仰ぐ事ができて、仏になられてるということは阿弥陀様
と同じように、「なんまんだぶつ」になって「今」私のと
ころに届いてくださってる、包んでくださっているという教
え。他の浄土教というのはやっぱりある意味死を待つと
いうその場だけの歴史の中では自分から命を絶って
「早くお浄土へ行こう」と考えた人もいますけど、浄土真
宗はもう「今」なんだと。

「いつでもどこでも」というフレーズがありますけど、あれ
なんか最近CMで「いつでもどこでも繋がる」とか言っ
て、軽いフレーズに聞こえてくるので、いつでもどこで
もってあんまり今お説教で言わなくなって、「今ここに」と
言っているんですけども、今、本当に今ここにもう救
いが届いてるっていうもうこれがやっぱ何よりも大事な特
徴ですね。

住職

そうですね。僕も星野元豊さんが書かれている書物
の中に、親鸞聖人がなぜ阿弥陀様の教えに傾倒するの
かという、いろんな仏の教えがある中で、偉い位の仏
になるにはこれだけの修行しないといけないというふう
な教えがある中で、「今私が救われる教えが何なのか
を知りたいんだ」という、「仏の位なんて関係ない」という

住職

ようなところがあるんじゃないかと考察されていました。やっぱり必死さっていうのが当時の親鸞聖人が抱えていたところがあるのかなと。それを考えたときに、やっぱり誰でも「今」救われていく教えっていうのが、親鸞聖人も必要だったし。それは翻って今私達にも必要なもののかなと思ったら、確かに浄土真宗の特徴の一つで大事なところなんだなと思います。

能美潤史

親鸞聖人が必要だったのはやっぱりそこで、親鸞聖人は「結局、死んだ後救われるって言われても、それじゃ今のこの自分に救いはないんだ」というね。今降っている苦しみの雨が「今」冷たいんだから、死んだら大丈夫だと言われたってやっぱり今、今ここでね、救いに出会っていくっていうのが、ありがたいと感じたのだと思います。

Q3. 仕事で特別に取り組んでいることはありますか？

住職

「仕事で特別に取り組んでいることはありますか」というところで、これは教授という立場でも僧侶であったり、あるいは御自坊であったりですが、その仕事の中で特別

に取り組んでいることはありますかというところで「実家のお寺で3ヶ月に一度、『浄土真宗初めの一步』という講座を開催しています。これまでお寺参りや浄土真宗の教えに関心がなかった方々を対象とした講座で、近年はこの講座に特に力を入れている」と答えていらっしゃいました。

『浄土真宗初めの一步』こちらは「関心がなかった方々を対象とした講座」というふうなところなんですけれども。これは完全に一般の方々なんですか。

能美潤史

これはご門徒さんやそうじゃない人に関わらずです。きっかけはやっぱり、おじいちゃんおばあちゃんが歳をとってお参りに行けなくなって、子供さんたちはいても、お参りされなかったり、都会に出ているとかで、





お寺にお参りする方が減っているっていうのはもう目に見えてわかる中で、妻と一緒に考えて、初めの一步っていうのを、第1回をやってみようと。最初はもう20人ぐらい声かけて15人ぐらいのスタートでやっていましたが、だんだん軌道にのってきて、私がパワーポイントで、スライドをお見せしながら紙芝居みたいな感じで、わかりやすく喋りますからって頑張ってる。会員さんが今81名まで増えました。もちろん全員が都合が合ってくるわけじゃなくて、それでも40人から60人ぐらいが毎回来てくださって、去年は20回記念で酒蔵巡りみんなでしたり、それで一般の方々もご支持いただいて、「うちは浄土真宗

の門徒だけど何にもわからないよ」という人とか、「お寺参りはどうしたらいいの」という人ひっくるめてとにかくきてくださいって宣伝して。

住職

最近はこういうふうなことをされる方もちょっとずつ出てきていますが、ただやろうと思うけどどういうふうにしたらいいのかわからないという方もいらっしゃる中で、御門徒だけでなく一般の方も含めてもう誰でもというすごいですね。

能美潤史

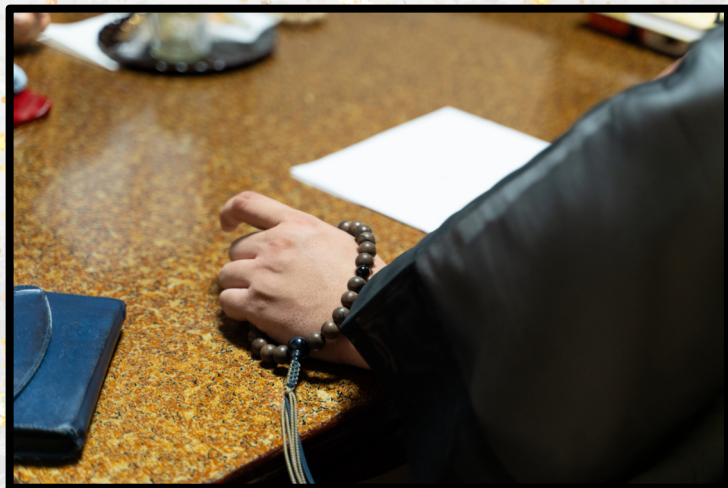
特別に力入れています。

Q4. 門信徒に向けて伝えたいことがありますか？

住職

こちらですね「偉そうなことは何も言いませんが、お念仏とともに生きることで人生が豊かになるということは胸を張って言えます。お念仏を大切になさってください」と答えていただいたところですね。

「お念仏とともに生きる。これが人生が豊かになる方法である」といただいておりますが、全体の質問を通して、



そんなお話が度々出てきてと思うんですけれども、やっぱり「お念仏」この浄土真宗の中で言えば特にこれを大切にしていって、これをただ大切にするというか、意味合いをちゃんと考えて生きていくと、人生が豊かになっていくっていうふうなところ。一番最初の質問に帰ってきて「人生のよりどころ」にも通ずるのかなと思いますけれども、やっぱり門信徒に向けてというところではこれが一番大事なところですかね。

能美潤史

結局、「ただ生きてただ死んでいく人生なんだ」と、そう捉えたらもう虚しいだけの人生ですけど、梯實圓先生

が「人生が虚しいんじゃないんだ、いただくべきものをいただかない人生が虚しいんだ。

人間というのは仏法をいただく器として生まれてきたと捉えると、器に仏法を満たす人生なのか満たさない人生なのか、仏法で満たす人生ならもちろん豊かになるんだ」とおっしゃっておられました。

人生自体は決して虚しいわけじゃないんだと、自分の生き方が人生を虚しくさせてるんであって、会うべきものいただくべきものにあっていく、いただいていくという、そこが大切かなと思いまして、「お念仏と共に生きることがが人生を豊かにする」と答えさせていただきました。

住職

宗派の言葉の中にも、「自他共に心豊かに暮らすことのできる社会の実現に貢献する」というのが一つの使命としてありますけれども、念仏とともに生きることというところをどう私達がちゃんと伝えていくのか、ここがちゃんと伝わっていけば人生が豊かになっていくんだけれども、先ほども言っていたように、ちゃんと伝えられるかどうか。ここを、大切にしていけないといけないのかなというふうにやっぱり全体を通して実感していった次第でございます。

インタビュー要約

このインタビューでは主に浄土真宗の核心と、現代社会における僧侶の役割について教願寺の住職が教授であり僧侶の能美潤史氏にインタビューを行いました。

能美氏は、兄が寺の後継者を辞退したことから自分が後継者となった経緯を語り、その経験が浄土真宗の教えを深く学ぶきっかけになったと述べました。自身の理解が単なる知識から精神的な気づきへと変わったことを説明し、浄土真宗を「人生の依りどころ」と表現しています。能美氏は、他の仏教が自己修行で悟りを目指すのに対し、浄土真宗では死後だけでなく今この瞬間に阿弥陀仏の慈悲による救いがあると強調しました。

また、自坊で開く「浄土真宗初めの一步」という講座を通じて、寺の信徒だけでなく初心者も巻き込んだ地域活動も紹介しました。

インタビュー全体を通して、僧侶は念仏の普及を妨げない生き方を追求し、念仏と共に生きることが人生を豊かにすることを強く訴えました。

この度、能美潤史先生におかれましては長時間のインタビュー誠にありがとうございました。

今回掲載させていただきましたのはほんの一部です。インタビュー記事と要約の全文につきましては、ホームページにて掲載しておりますので、そちらもチェックしてください。



戦後80年 -過去へ繋げるメッセージ- 話者 教願寺 北氏緋紗



和歌山大空襲は、1945(昭和20)年7月9日深夜から10日未明にかけて、アメリカ軍のB29爆撃機108機が和歌山上空に飛来。約800tもの焼夷弾(しょういだん)投下。町は火の海となり、市街地の大半と和歌山城の天守閣が焼失し、1,100人以上の人々が死亡。4,000人以上の人が負傷しました。

当時、私は6歳。田畑のある方へ逃げようということになり、母は私をはぐれないように腰ひもで結び、自分の体につないで、弟をおぶって焼夷弾をよけながら走りました。火が迫ってとても熱い中、必死に走りました。一斗缶のようなものも飛行機が落としたので、怖かったのを覚えています。

一面焼け野原になったのに紅いカンナの花が咲いていました。戦争の記憶は風化しつつありますが、カンナの花を見ると、熱くて怖くて必死で逃げた記憶がフラッシュバックしてつら

いです。

本願寺鷺森別院では、毎年7月9日に平和を希う念仏者がつどい、先の戦争で亡くなられたすべての方々に哀悼の意を表して法要をお勤めいたしますが、先の戦争を風化させないようにとの願いがあると考えます。

どのような理由をつけても戦争は人殺しです。正義の戦争などありえません。戦争をしてはいけません。

では、戦争がないだけで「平和」といえるでしょうか。世界で軍備を最初に放棄した国は、日本。次いでコスタリカ。大統領ホセ・フィゲール様のつれあいであるカレン・オルセン様が日本で公演中に、小学生が質問に立ちました。「平和の反対語を教えてください。」オルセン様は「それは戦争・紛争ではありません。飢餓・貧困・暴力・虐待・差別などが沢山あります。これらの原因がなくならなければ、新た

な争いにおびえて争いの準備をするでしょう。平和を考えるということは、人間如何に生きるべきかを考えることです。」とやさしく話されたということです。

私たちは残念ながら「記憶が風化」していくのを見過ごしています。もし皆さんが心から平和を求められるなら、過去の忌まわしい歴史をも正面から見据えて忘れないようにしなければなりません。そして、もしもひとつの生命がおかされるような事が起きたとき、私たちはそれを悲しみ、痛む心を持ち続けなければなりません。大切なのは、平和を論ずることではないはずです。

広島を代表する詩人栗原貞子様(吉永小百合様の朗読で有名)の詩「生ましめんかな」を皆さんに読んでいただきたいと思います。皆様と共に、この戦後80年という年を考えていきたいと思います。

文章法話

人の「変」と「不変」について



あくしょう

悪性さらにやめがたし

じゃかつ

こころは蛇蝎のごとなり

しゅぜん そうどく

修善も雑毒なるゆゑに

こけ

虚仮の行とぞなづけたる

しょうぞうまつわさん

親鸞聖人著「正像末和讃」

私が初めて仏さまのお話を聞いたのは、おそらく小学生低学年の頃だったのだと思います。「おそらく」というのは、仏さまのお話を聞いたという明らかな記憶がないからです。けれど、その頃にはもうすでに亡くなったものに対して手を合わせる、いわゆる「合掌」を既に知っていましたから、その頃には既に仏さまのお話を少しでも聞いていたのでしょう。

つまり、仏さまのお話を聞いたその時から、私は死者に対して手を合わせる。仏さまに対して手を合わせる人に「変わった」のでしょう。

人は何かを知った後、知る前の人には戻れないと、

私は考えています。例えば、火が熱いと知らない人は、全く火を恐れないかもしれませんが、一度火に触れて、手を焼けどした人は、その後の人生をずっと「火は熱い。危ないものだ。」と考えるでしょう。火が熱いと知らず、全く恐れなかった自分には戻れないのです。衝撃的な記憶・知識であれば間違いなくそうなるでしょう。

私にとって仏さまの話とはまさに、幼いながらに衝撃的なお話だったのだと思います。子どもの頃は鳥や猫など、車にひかれていたり、餓死していたものがいれば、必ず合掌しておりましたし、時間があり、体力があり、場所が良ければ埋めてやりもしました。他人からは決して褒められるような行いではなかったかもしれませんが、私にとってはとても大事なことだったのでしょう。

ただ、なんとなく覚えているのですが、その行いというのは決して亡くなったものを思って純粹にした行いではなかったと思います。私は亡くなったものを通して、

自分を見ていたのではないかなと思うのです。誰にも関心を向けられず、打ち捨てられている彼らを見て、私がもし同じく打ち捨てられていたとして、誰かが手を

合わせて埋めてほしいと。そこまで具体的に考えていなかったかもしれませんが、それに近い思いを持っていた記憶があります。

いま、大人になって、親鸞聖人のお話を聞かせていただいていると、この思いは親鸞聖人も同じく考えていたことだろうということを知ることになりました。偏に、

「このような私がたすかるための救い」

仏さまのお話で合掌させていただく人には変わりましたが、それでも人々を助けたり欲から離れていくための行は相変わらず行えず、いまだ「私が」救われたいと思う虚仮の行しかできない我が身ではありますが、それでも救うと誓われた阿弥陀仏さまのお声をたよりに、お浄土に参らせていただければ幸いです。

願わくば、お浄土にて菩薩とならせていただけたならば、今度こそ純粹な気持ちで合掌できればなど、そう思う次第です。

教願寺 住職 横出顕悟

教願寺年中行事表

令和8(2026)年度

1月	1日(木)	午前0時	元旦会
	10日(土)	昼座2時	お七夜
	11日(日)	午前10時半	おこう(納骨墓の建碑式も行います)
2月	15日(日)	午後2時	仏教婦人会・お内仏報恩講
3月	18日(水)	午後2時	春の彼岸会
	～ 20日(金)		
4月	12日(土)	午前8時より	永代経法要厳修
5月	21日(木)	午後2時	親鸞聖人降誕会法要
7月	5日(日)	午後2時	植木の手入れご奉仕
9月	15日(火)	午前9時	仏教婦人会による清掃奉仕
	21日(月)	昼座2時	総代並世話人追悼法要
	22日(火)	昼座2時	仏教婦人会役員追悼法要
	23日(水)	昼座2時	戦没者追悼法要
10月	1日(木)	午前9時	仏教婦人会による仏具のお磨き奉仕
	10日(土)	午後2時	報恩講法要勤修
11月	29日(日)	午後1時半	住職継職法要
12月	31日(木)	午後11時30分	除夜会

お知らせ

1. 納骨墓について

1月のおこうにて、建碑式を行います。これからお寺で大事にさせていただくお墓の大事な法要ですので、皆様ご出席ください。

納骨申請につきましては現在検討中です。

2. 畳入れ替えについて

2026年の2月の間に畳が入れ替わる予定です。法要がある日程を避けて入れ替える予定です。作業の妨げにならないよう十分お気をつけてお参りください。

3. 住職継職法要について

2026年の11月29日(日)に法要を予定しております。また日程そのほか決まり次第再度案内いたしますが、ご門徒のみなさまにはご予約にお加えいただきますようお願い申し上げます。



ホームページでも情報を公開しております
ぜひご覧ください！

<https://kyouganji-1672.com/>
QRからもアクセスできます





浄土真宗本願寺派 乗雲山 教願寺
〒640-8442 和歌山県和歌山市平井424
TEL: 073-451-0898